

---

# 生きた証

邪餽 珀磨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生きた証

### 【Nコード】

N2762B

### 【作者名】

邪餽 珀磨

### 【あらすじ】

岩瀬タケトとその愛犬・サルサの前に現れたのは月神キールと名乗る青年だった。タケトとサルサ、そしてその周りの仲間達が巻き込まれた事件(?)とは……

## FILE0：プロローグ（前書き）

自分なりにアレンジしたものです。知ってる人も知らない人も気軽に  
見て下さい。評価・感想待っています！

## FILE 0：プロローグ

オレが最初に感じたのは温もりだった。

真つ暗な場所にいるのに、オレの周りはいつも温かかった。

これが母というものか……。

オレはそう思った。

すると、オレに語りかけて来る声が聞こえた。

”優しくなつて。どんなことにも負けないで”

女性の声だった。

これが母か……。

”強くなれ。そして大きくなれ”

男性の声だった。

これが父か……。

そう思った。

ずっと……、目が覚めるまでずっと……。

オレの目覚めが近付くにつれて、周りにあつた温もりは薄れていった。

やがて、オレの周りから温もりが消えた。

温もりが消え去つてもオレは眠り続けた。

誰もオレを起こしてくれなかつたから……。

だが、それを続けるわけにもいけない。

だから、目を開けたんだ。

あんな思いをする為じゃねえ。

オレが最初に見たのは真つ暗な場所と、真つ赤な血の海だった。

そこには母の姿も無く、父の姿も無い。

あつたのは、肉の塊とコウモリの死体だけだった。

その瞬間、オレの中で何かが切れた。

そうか……。オレは本当のコウモリなのか。

オレは本当にそう思った。目の前のことが悲しくて、信じられな

くて・・・。

オレの名前は、月神キール。

父の苗字とコウモリにちなんで付けてくれた母に敬意を示して考えた名前だ。

オレはワイルドハーフ。人間とコウモリの間にも生まれた混血児。

オレは両親を殺した奴を許さない。

絶対に・・・。

FILE 1 : 転校生・月神キール(前書き)

プロローグ以外は、作者目線で書いて有ります

## FILE 1：転校生・月神キール

君は、ワイルドハーフを知っているだろうか・・・？

それは人の言葉を語り、人の姿となることが出来る動物達のことだ。

だが、彼等にもそうなる条件がある。

それは『情』だ。

ワイルドハーフの素質があっても、『情』さえ無ければそれはただの動物と同じだ。

ワイルドハーフはどんな動物でもなれる。

ただし、ワイルドハーフ種でなければならぬが・・・。

一番多いのは、犬のワイルドハーフだ。彼等は人との『情』が一番深い。

次に多いのは猫のワイルドハーフ。彼等も犬と同様、人との『情』が深いのだ。

ここまで説明すれば分かると思うが、ワイルドハーフは人が飼う動物が多い。

今までの異例としては、鳥のワイルドハーフや豹のワイルドハーフがいる。

彼等は『怒り』という『情』で目覚めたらしい。

君の隣にも、ワイルドハーフは潜んでいるのかもしれない・・・。

今日、ある高校に転校生がやって来た。

しかも、有り得無い時期に・・・。

春だぞ？春！

この間、入学式が終わったばかりだ。

そして、転校生は岩瀬タケトのいるクラスに来たのである。

この頃はまだサルサのワイルドハーフとしての力が残っていた。

その転校生が先生の口から紹介されると、先程まで眠りかぶって

いたサルサが目を覚ました。

ちなみに、サルサは岩瀬タケトが飼っている犬である。

「うわぁ・・・（汗）。派手な人が転校して来たなぁ」  
タケトが呟きつつ、転校生を見る。

「月神キールです。ヨロシク」

転校生・月神キールはそう言ってニコツと笑った。

クラス内が、ザワザワと早速噂話を作りあげていく。

これがどんどん大きくなっていくのである。

噂好きなタケトのクラスでは当たり前のことだ。

キールは、先生に導かれて日の当たり難い席に座る。

そこはタケトとサルサの後ろの席だった。

サルサはタケトを小さな声で呼びかける。

「ん、何？」

「あいつ・・・獣の匂いをするのだ」

小声でそう言われて、タケトはそつとキールの方を見る。

キールはそれに気付き、微笑んで小さく手を振った。

単純なタケトには、それが本当とは思えない。

だが、『匂い』が分かるサルサの言ってることが嘘とも思えない。

タケトは混乱して頭を掻いた。

シートホームルーム

SHRも終わり、キールの周りにクラスメートが集まった。

「なぁ、お前ってハーフ？」

「そうだぜ？・・・何か変か？」

「いや、”キール”って名前も珍しいな・・・と思ってさ」

キールは”ハーフ”という言葉に反応する。

質問した本人には悪気は無い。キールの反応に、素早くその理由を付け加えた。

暫くして、クラスメートの質問タイムは終了する。予礼が鳴ったからだ。

サルサは、周りに人気が無くなったことを確認してキールに聞いた。

「・・・」

無言かいつ!!(ツッコミ)

そう、無言である。

サルサには、キールから獣の『匂い』が気になっていた。

確かに、確かに獣の『匂い』はする。だが、そうではない、人間の『匂い』もするのだ。

「・・・何？」

自分の目の前で無言で、しかも、睨みながら佇むサルサにキールは短く聞いた。

「貴様・・・。もしかしてワ・・・」

「そ。オレ、ワイルドハーフ」

サルサが慎重になって聞いたのに、キールはニコニコと微笑んで答えた。

サルサは、ポヘツと一瞬だけ気が抜けた。

「ぷっ・・・くふふ」

サルサのあまりにも間抜けな表情に、キールは吹き出して笑った。

「ワイルドハーフの・・・サルサだろ？」

小さな笑いがようやくやく止まると、キールはまだ名乗っていないサルサの名前を口にした。

サルサは密かにビククリしていた。

”名乗っていないはずなのに・・・”と、サルサは顔をしかめる。

キールは、そのコロコロ換わる表情にまた笑いそうになる。

「何故なぜ・・・俺の名を・・・？」

コロコロと表情を換えるのを止めたサルサが言った。

「オレは・・・情報屋だからな」

笑いを堪えて、キールは言った。

「ちよっ・・・」

キーンコーンカーンコーン・・・

サルサが更に質問しようとしたが、調度その時本礼のチャイムが鳴り、現国の先生が入ってきた。

サルサはタイミングを逃し、自分の席に戻った。

授業は、何事も無く終わり、再び

キールの前に人が集まった。

先程は男子、今は女子だ。

キールはズバリ、クラスには無いタイプのモテ男君である。

キールの、黒・・・のよう<sup>ひとけ</sup>に見えて紫色の髪、同じく黒っぽい紫色の瞳が女子の興味心を惹き付けたからだろう。

またもや、サルサはタイミングを逃してしまったのだ・・・。

結局、放課後まで声をかけること

が出来なかった。

サルサはタケトと一緒に帰る。

人の姿では無く、本来の犬の姿でだ。

「ねえ、サルサ？月神君、本当にワイルドハーフなのかな？」

人気の少ない路でタケトは聞いた。

「本人もそう言ってたのだ」

暫く歩いて、路に人が全くいなくなった。

日も沈み欠け、空に青白い月が顔をだす。

サルサは脚を止めた。

”何かいる・・・”と警戒し、辺りの『匂い』を嗅ぎ回る。

「この『匂い』は・・・月神か!？」

サルサの予想は当たっていた。

キールはタケトの後ろにいた。

異常に伸びた鋭い爪を、タケトの喉仏に当てながら・・・。

「よお・・・。探したる？出てきてやったぜ」

キールは微笑んで言っているが、瞳だけは微笑んでいなかった。

誰かを殺し兼ねないその瞳は、爪を突き付けられているタケトとサルサを凍り尽かせた。

サルサが少しずつ、少しずつ近付くと、キールもその分だけ爪をタケトに突き付けた。

「おっと！動くなよ・・・こいつの喉、切り裂くぜ？」

「タケトを離せ！何が目的なのだ？」

サルサは必死になって言う。

キールはサルサを見て言う。

「取引だ……！」

ビリリ……！！

キールはタケトの制服を切り裂いた。

タケトの白い肌に月のアザが浮かび上がる。

それは、以前に無くなったはずだった。

驚いたのは、タケト本人である。

「やっぱりな……。奴等が狙うのも分かる」

キールは、そう呟いた。

「サルサ、こいつの月のアザ……どうしたい？」

サルサは考えた。普段それ程考え無い頭で一生懸命。

月のアザがあれば、強くなれる。だが、サルサの決断は……。

「俺達には必要無いのだ」

……だった。

その瞬間、キールに笑みが溢れる。

今度は、本当の笑みだ。

「では、改めて取引だ。暫くオレに付き合い、そうしたらタケトは返す」

「付き合い合え」？……いったい何に」

サルサが考え込む様子を見せると、殺気が身体中に突き刺さるような感覚に陥った。

キールの顔に笑みは無い。

「お前えに、選択肢なんざねえんだよ……。オレに協力しないってんなら、タケトは……」

そう言つて、キールはタケトの喉仏から心臓に突き換えた。

「分かった！協力する！」

「それでよし！ほら、タケトは返すぜ。悪いな、痛かったろ？」

キールはタケトに謝っていなくなった。

まだ、サルサ達に何を協力して貰うのかを言っていなかったとい  
うのに・・・。

FILE 1 : 転校生・月神キール(後書き)

ガンダムSEED TRY・Sもヨロシク!  
評価待ってます

## FILE2：狙われし者（前書き）

暫く投稿できませんで、申し訳ございません。ほぼ、一ヶ月ぶりです。今回はあの、ネコ娘が登場致します。感想・評価待ってます

## FILE 2：狙われし者

「よお、遅刻か？」

昨日のことが嘘のように、キールは明るく言った。探偵の仕事が終わったサルサは目を丸くした。

「ん？なんか付いてるか？」

サルサは首を振って答えた。

キールは”変な奴・・・”と言って、小さく笑った。

残りの一日が、サルサには何時も以上に、長く感じられた。時間は刻一刻と過ぎ、辺りは一気に暁色。

普段、日が当たり難いキールの顔にも照らされる。

「タケト、サルサ。ちよつといいか？」

そう言つて、キールは二人を呼んだ。

場所は変わって、屋上。

そこに、三人はいた。

キールは、少し影のある場合に座つてタケトとサルサを見つめた。

「さて、昨日の続きだ・・・」

タケトとサルサの二人は、キョトンとしてキールを見つめ返した。

「お前達・・・いや、タケトを狙う奴のことだ」

「え？俺なの？」

「ああ」

キールは短い返事、小さく頷いた。

「奴等は、タケトの『胸の月』を狙つてる。オレは、そいつ等の命を狙つてる。だから協力して欲しい。・・・分かつたか？」

二人の目は、点になる。作者の俺様でさえ、意味分からん！

要するに、タケトを狙う奴等は、キールを狙つてる奴等で・・・。

「分かつたか？（怒）」

反応のない二人に、苛ついたキールが言う。

二人共、キールの怒りを静めるように頷いた。

「て、な訳で・・・お前等の家に泊めてくれ！」

「・・・は？」

暫くの間が空いて、二人は口を開いた。しかも、疑問形で。

「は？」じゃねえよ」

キールは、額に青筋起って言い返した。その瞳は据わりきっており、とても怖い・・・。

二人は渋々、承知した。タケトの頭の中には、兄の反応だけが心配で、いろいろグルグルしている様子。先刻からタケトの動きが面白い。

どうやら、兄はまだ帰って来ていないようだった。

サルサもキールも動物の姿に戻ると、それぞれの気に入る場所ですとうとうと・・・と始めた。

タケトは仕方なく、夕飯を三人分作り始めた。

ふわぁ・・・つと、漂って来るいい匂いに、二人はゆっくりと目を覚ました。

「サルサー、月神くんー。とりあえず、これ食べて」

タケトが差し出したのは、普通の人間が食べるような食事と、骨付き肉。

それに・・・。

「トマトジュース・・・？」

骨付き肉に惚れ惚れするサルサの隣で、キールは苦笑を見せていた。

「・・・おい？」

「ん？どうしたの月神君。あ、もしかして飲み難い？」

”い、いや・・・そうじゃ無くて”

と呟くキールなんか放って置いて、タケトはコップに注いだトマトジュースにストローを差した。

タケトの天然振りに、仕方なくそれを飲むキールだった。



タケトは気付かなかった。 己の命を狙う者が、すぐ後ろにいたというのに……。

「よお、元気？」

タケトは、びっくりして言葉も無かった。何故ならそこには、キールの姿があったからだ。

「う……ん。元気だけど、月神君は？」

やっと、脳裏に言葉が出て来たのがそれだった。

その問いに、キールは呆れたように鼻で笑った。

「今の俺が、不元氣に見える？」

「見えない……です」

キールの瞳が笑っていないのが分かったのだ。

タケトが真剣に答えると、その様子が面白くて次は本当に笑った。

タケトが胸を撫で降ろして、自らの席に座る。

クラスの中に、だんだんと活気が溢れてきた。

そろそろ、HRが始まるのである。

「おっはよ〜」

明るく元氣のある声で入って来たのは、昨日まで来ていなかった女子生徒だった。

その後ろから、大人しそうな髪の毛の長い、同じく女子生徒も入って来た。

北原美也と、北原美玲である。ちなみに、髪の毛の長い方が美也で短い方が美玲だ。

キールは初対面だった。

「……タケト、こいつ誰？」

美玲が言う。

タケトは、「転校生」と答えた。

美也は、「初めまして」とにつこり微笑んで言った。

キールも、返事と一緒に微笑み返した。

「月神キールだ。ヨロシクな」

美玲も一応、自己紹介だけはした。

「はいっ！自分の席に着いて〜」

それぞれの自己紹介が終わると、タイミング良く先生が教室内に姿を見せた。

美玲は、少しだけ気になっていた。キールの正体が……。

HRの途中で、美玲の頭に何かが当たった。

それは、美玲の目の前に落ちた。小さく丸められていたそれを広げると、こう書かれていた。

”ヨロシクな！ネコのワイルドハーフさん！！”

美玲・・・ネコのワイルドハーフ、ミレイは驚いて振り返った。

その先には、ニヤリと微笑を見せ、手を振るキールの姿があった。

”ムカツクっ！！”

ミレイはそう思いつつ、真面目にHRを受けた。

#### 昼休み

皆がグループになって、弁当を食べている。

教室の隅つこに、タケト達のグループがいた。

「ズバリ！あんた何者！？なんで、私の正体を知ってるの？」

タケトは自分の手作り弁当、美也はミレイと同じ魚が多い手作り

弁当、キールはトマトジュース……。

それぞれが、それぞれの物を食べていた時に、ミレイはご飯粒を頬に付けて言った。

「おい、おい。まだ気付かねえのか？お前、俺の”匂い”が分かるか？」

ミレイは”匂い”を嗅ぐ仕草を見せていたが、眉間にシワを寄せ、て首を傾げた。

「もしかして……？」

ミレイは、自信無さそうに呟いた。

「そ、俺もワイルドハーフなの。でも、流石ネコだな。”匂い”に鈍い」

キールは呆れた様子で、トマトジュースを”ズズズズウ〜ッ”と飲みながら言った。

「な、何よっ！悪かったわねっ！！」

キールがクスツと笑った。

すると、その場は笑いに包まれた。

放課後

帰り道が一緒な四人は、途中でLUNAに寄って行くことにした。

そこに、何が待っているのかも知らずに……。

## FILE3・狙いし者(前書き)

感想・評価待ってます。感想だけでもいいですよ

### FILE 3：狙いし者

キールを連れ戻したタケトは帰りの途中で、レンタルペットショップのLUNAへ行くことにした。

「あつ！今日はニヤジローと決闘の約束してたんだっけ！」

そう言つて、ミレイはネコの姿に戻ると風のように去つて行つた。「あつ……ミレイ、待ちなさい！ごめんねタケト君、また誘つてね？じゃあ……」

そう言つて、美也もその場から去つて行つたのだつた。

あつという間にその場に残されてしまったタケトとキール。

タケトはどうしようかと悩んでいたが、キールはニコリと笑つて行つてみたい”と言つた。

心外だつた。

キールが、そんなこと言つとは思つてもみなかつたからだ。

タケトは微笑み返して、早速LUNAへと案内することにした。

「なんで、行つてみたいの？」

タケトが言つ。

キールは暫く黙つていたが、静かに口を開いた。

「噂で聞いてたからな。それに……」

最後の方はあまり聞き取れ無かつた。

タケトはもう一度、聞き出そうとしたが……辞めた。

キールが、遠い目をしていたから。何かあつたと悟つたタケトは聞くのを辞めたのだ。

「そこを曲がつてすぐだよ」

目の前にLUNAの文字が見えた瞬間、キールの足が止まつた。

「タケト！下がれ！！」

タケトの身体が動く前に、キールは力一杯その腕を引き寄せた。

キールは一瞬で、その場を2M程離れた。

先程までタケトがいた場所に、鋭い爪を起つて落下して来た者が

いた。

そいつは、確実にタケトを狙っていた。

だが、それ以上何もせず一瞬で去って行ってしまった。

タケトには、全てが一瞬だった為に何があったのか・・・はつきりとは分からなかった。

「チツ・・・、もう嗅ぎ付けやがったか！」

一人で呟くキールを見て、タケトは混乱した。

キールは、とりあえず身を隠す為にLUNAの中へと入って行った。

「こ、こんにちは〜」

タケトは、不安そうに挨拶する。そこには、犬やらネコやら、しまいには馬なんて生き物もいた。

タケトが足を踏み入れた瞬間、奥の方で何かの音が聞こえた。

『てやんでー！そう、何時も何時も捕まって堪るかー！！』

何処にもいそうな、元気なオウムの声だ。

暫くすると、そのオウムがタケトとキールの前に現れた。

「ポリネシア？また、烏丸先生から逃げてるのか・・・」

タケトは呆れた。

何時ものことながら、ポリネシアの行動には絶句する。

ポリネシアは、素早くタケトの後ろに隠れた。

「ポリく〜ん 注射しなきゃダメですよ〜」

ポリネシアが出て来た奥の方から、グルグル眼鏡をかけた人が注射を片手に走って来た。

烏丸先生本人である。

てか、あんた危ないって！！

キールは、面白そうにポリネシアを摘み上げた。

『な、何しやがるっ！離しやがれっ！俺はLUNAの営業部長だぞ！！』

ポリネシアは、思わず声を上げてジタバタもがいてみたが、キールの手から離れことは出来なかった。

タケトは、もう何も突っ込まない。何故なら、既にキールの瞳が変わってしまったからである。

「俺さあ、腹減ってるんだよね。後、少し・・・そおだな。お前くらいの大きさなら、腹一杯になりそうだ」

キールがそう言っつて、ニコリと微笑するとポリネシアの顔が、青冷めた。

「おい、こいつ何なんだよ・・・。まさか、サル犬とバカネコの仲間か？」

ポリネシアは、恐る恐るタケトに聞いてみた。

タケトは黙って頷き、「コウモリのね」と付け加えて言った。

「ポリネシアだっけ？俺の餌になるのか、あの先生の注射の餌食になるのか・・・どっちがいい？」

ポリネシアは黙って考え込んでいた。が、やがてそうもいかなくなる。

キールが、一本の指の爪だけをパキパキツ・・・と音をさせて尖らせていた。それを、何も答えないポリネシアの喉元に軽く当てる。

「どっちがいい？」

キールは、瞳が笑っていない微笑みを作った。

「いやー！助けてえー！コ・ロ・サ・レ・ル~~~~！」

ポリネシアは、恐怖のあまり泣きながら奥の方へと、戻って行く。死ぬより、注射の餌食になった方が、幾らかマシだからだ。

その後、ポリネシアの悲鳴のような叫びを、タケトとキールは笑いながら聞いていた。

「行ってみる？泣いてるポリ見に」

タケトは、まだ笑っているキールに言った。

キールは、笑いを堪えながら

「行く」

と答えた。

#### LUNA奥の部屋

そこには、色々な動物に注射を打ったり、診察をしたり、動物達

とコミュニケーションを取る男性がいた。

彼の名前は、烏丸カオル。愛犬・銀星を二十年以上探し続けた人物だ。

そして、烏丸クリニック（動物病院）の先生である。

先程も登場したあの、片手に注射器持った人のことです。

その隣には、銀色の犬・銀星が静かにして待っていた。

銀星は、タケトの”匂い”でこちらに気が付いたらしく、二人の姿を見てニコリと笑った。

「銀・・・？」 キールが言った。

銀星は気付いていないようだ。

だが、隣にいたタケトは気付いていた。

キールは

「満足した」

と言い残して、先に帰って行った。

#### 公園

。。  
辺りも暗くなって、人々の姿を見ることはあまり無くなった頃・・・

公園内の木々が、風も無いのにザワザワと揺れていた。

そこに、三人のワイルドハーフが不適な笑みを見せて立っている。

「キールの奴、随分と大事にしてるね」

「月の持ち主の”匂い”と、父親の”匂い”が似てるせいだろ？」

「俺達も、さっさと月の力を手に入れねばな・・・」

三人のワイルドハーフの笑い声は、風と共に消えて行ったのだった。

FILE 4 : 誘拐 (前書き)

感想・評価待ってます!!

## FILE 4：誘拐

キールが学校に来て、もう一週間が過ぎていた。

ここ最近、妙な事件をよく耳にするようになった。

なんと、犬達の死体が大量に見つかるといふものだ。

その犬達に血液は、一滴も残ってなく、今では吸血鬼によるもの・  
・と考える者もいるらしい。

そのおかげで、キールはサルサに見張られていた。

うんざりしたように、ため息を吐いてみせる。

そして、いつものように授業が始まると同時に、軽い眠りにつく  
のだった。

### 放課後

サルサの見張りは、やっぱり続いていた。

授業の間も、休み時間も、昼休みも……。

少々、やり過ぎではないか？サルサよ……。

今の今まで、ずっと我慢していたキールが腹を立て始めていた。

「おい、いつまで付いて来るつもりだテメエ……」

「お前が犯人じゃないと分かるまでな」

サルサは、吐き捨てるように言った。

キールは舌打ちをして、そっぽを向いて口を尖らせた。

子供かお前は……（汗）。

タケトも同じように思ったのか、密かに苦笑を見せていた。

しかし、そんなこと獣人族の二人には”匂い”で分かる。

タケトを見る二人の瞳は痛かった。

「だるいっ！タケト、ポケット貸せ！」

今までずっと、人型でいたせいもある。だが、今日は日差しがき  
つかった。

元々、暗闇に住むコウモリの獣人族であるキールにはいい状況で  
はなかった。

キールは、周りに人がいないのを確認すると、着ていた服を脱ぎ捨ててコウモリになってタケトの制服の胸ポケットに身を隠した。

「これである事件が起きたら、俺様は”シロ”だからな」

キールはタケトのポケットの中で怒鳴った。

元が小さい為に、それほど五月蠅くはなかったが、ポケットがビリビリ響くくらいの怒鳴り声を上げていた。

サルサはまだ、信じることが出来ないようだった。

サルサとタケト……。なんだか、久しぶりに二人きり(?)になれた気がした。

「タケト、お前は奴に優し過ぎる!!」

暫く静かに道を歩いていると、サルサがしびれを切らすように言った。

「そーかな・・・？俺は別に」

「いいや！甘いつ！甘過ぎる!!」

サルサは、質問しておきながら返事を聞く様子も見せず、自分の意見だけをタケトに押し付けていた。

俺にはサルサが拗ねているようにしか見えん！

タケトは、ただ静かにサルサの言い分が終わるのを待っているだけ。

おそらく、サルサが拗ねているだけと分かっているからだろう。

「……俺は信じるよ。月神君はそんなことする人じゃないって」  
サルサの言い分を聞き終わると、タケトは優しく答えた。

そんなタケトを見て、今までずっと文句を言っていたサルサが静かになった。

タケトが念を押して、”ね？”と言うと黙って頷いた。

そんなサルサを見て、タケトは少し笑みを溢した。

こんなふうに、いつまでも笑っていられると今、二人はそう思っていた。

だが……。

「『月』の持ち主、みいつけた」

その声は、二人の後ろから聞こえた。

女の子のような、明るく陽気のある声。だが、心は籠っていない。「貴様は何者だ!?!」

タケトの『月』を知っているということは、ただの人間ではないのだらう。

サルサは”まさか、まさか”と考えながら言った。

声の主は、いつの間にか二人の目の前に立って、ニコリと笑っていた。

二人に、嫌な汗が頬を流れた。

「ん、アタシ? アタシは牙羅まいら」

牙羅と名乗った女の子は、そう言ってタケトの腕を掴んだ。

「じゃ、この『月』の持ち主は連れて行くから。またネ 犬の獣人族さん・・・」

牙羅は自分勝手に話を進めて、タケトを連れて行くこととする。

サルサは、反対の腕を掴んで引き戻そうと必死になった。

「ムムツ、しつこいなあ。だから、犬族は嫌い!!」

牙羅は、自分の瞳を輝かせてサルサを睨んだ。

サルサの動きが止まる。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように・・・。

「そんなに恋しいなら、この上着置いてあげろ」

牙羅は動けないサルサを笑い、暴れるタケトを失神させて、タケトが着ていた服を投げ捨てていなくなった。

サルサの身体の硬直は、牙羅の姿が見えなくなるまでずっと解けなかった。

暫くして、キールは目を覚ました。

キールはサルサの様子が変だということに気が付いた。

脱ぎ捨てられた上着、サルサの様子からしてキールの脳裏に現れるのは”奴等”のことだけだった。

「サルサ・・・」

キールの声に、身体と声を震わせてサルサは返事を返した。

「キール……貴様、の……言っていた、” 奴等”、とは……」  
サルサは恐怖心に襲われていた。  
今回ののは、夕チが悪い。

あんなに、明るく陽気に笑っていた牙羅がとても恐かった。  
「そろそろ、お前に教えてやるよ。” 奴等” の正体をな……」

烏丸クリツク

キールは、場所を変えたいと言ってここに来た。

キールは庭にいる、銀星を訪ねた。

「サルサか？何かあったのか？」

サルサの姿だけを見た銀星が言った。

サルサは、銀星の質問に何も答えない。その代わりに、キールが人型になって答えた。

あ、服はサルサが着ていたのを借りてます。

「 奴等” だ、銀」

銀星は驚いた様子でキールの名を呼んだ。

「そうか……とうとう来たか。と、いうことは……” 奴等” に連れて行かれたのか？」

二人は始めて会ったような素振りを見せず、話を淡々と進めていた。

「なんだお前ら、知り合いだったのか？」

キールと銀星は話を止め、サルサを見た。

「 奴等” のことも、知ってたのか？」

銀星は迷い無く……。

「 ああ」  
と答えた。

サルサは、怒りに震えた。知っていたのに何も教えてくれなかった銀星と、銀星と知り合いだと教えてくれなかったキールに……。  
「教える！タケトを拐った、あいつらのことをっ！！」

そう言っつてキールを地面に押し倒す。

もし、キールが獣人族でなければ腕の骨が折れていただろう。そ

れほどの力だった。

キールは、サルサの恐い顔を目の前にしてゆっくり” 奴等は・・・”と語り始めた。

サルサの腕の力が、少し抜けた。

「 奴等 ” は・・・ 『王』 だよ。獣人族の、 『王』 」

「 『王』・・・だと？ 」

サルサは、キールの言葉に絶句した。

しかも、獣人族の 『王』 だと言うのだ。

それに何故、キールはそんなことを知っているのか・・・。

「サルサ、止める。そいつにあたってもタケトは帰っては来ない」  
冷静な銀星の一言で、サルサはその場に力無く座り込んでしまった。

「とりあえず、今はまだ大丈夫だ。 ” 奴等 ” はまだ、タケトに手出し出来ないからな」

キールは、サルサを自分の隣に退かすとそう言って頭を掻いた。

「何っ！本当か？」

サルサの顔が、サツツと上がる。

今にも襲いかかりそうなサルサの顔を、ムギツと手で押さえキールは ” 慌てんな ” と注意する。

「ぶあくか、お前じゃ ” 奴等 ” に勝てねえよ！」

キールが言った。

サルサは、あの時の恐怖感を思い出した。あの、牙羅とか言う女に感じた恐怖感を・・・。

「アレは、 ” 奴等 ” が 『王』 である証だ。あの瞳には、俺たち動物は何も出来ない」

珍しく、銀星が悔しそうな言葉を口にした。

「や、やなのだ。そんな冗談・・・」

サルサはそれを信じたくなって言った。だが、銀星が今の状況で冗談なんか言うはずもない。

サルサは仕方なく、（信じたくないが）信じることにした。

キールは、ただ遠くを見て何かを決心したようだった。

???

辺りは次第に暗くなっていた。ここが何処なのかは分からないが、一応外であるという事は分かる。

そこに、怒られる女の子の声が聞こえた。

「お、怒らないでよ（泣）。勝手に連れて来たのは謝るから」  
怒られていたのは牙羅だった。

牙羅の目の前には二人の男の子がいて、その内の一人が牙羅に怒鳴っていた。

「ったく……。そんなことだから、あの方に呆れられてるんだ。

牙羅！分かってんのか!？」

牙羅は、下を向いて小さくなった。

「まあ、牙羅が頑張ったということに変わりない。ここは、褒めてやっていいだろう？牙呀さいが」

牙呀と呼ばれた男の子は、小さく舌打ちをして怒鳴るのを止めた。

「アリガトウ 牙磨さいま」

どうやら、この三人は兄弟のようだ。この会話からして、牙磨

牙呀 牙羅だろう。

牙磨はニツコリと微笑むと、牙羅に注告した。

「いいか牙羅。今度また勝手な行動をしたら、兄さん許さないからな？」

牙磨は、凄んで言った。

その瞬間、牙羅の顔は青ざめていた。

黙って頷くと、牙磨は本当にニツコリと微笑んだ。

「あの方が来る前に、この『月』をどうにかしなければな……。隣にいるタケトを見つめながら、牙磨は言う。

”あの方”を待つ三人は、空に浮かぶ蒼く輝く月を見つめていた。

**FILE5：タケト、帰還（前書き）**

よろしければ、感想又は評価してください。

## FILE 5：タケト、帰還

「ん・・・？こ、こは・・・？」

寒々とした空の下で、タケトはゆつくりと目を覚ました。上着の無いタケトには寒すぎる。

その周りには、牙磨・牙呀・牙羅がタケトを見張っている。だが、その三人の姿は獣人型ではなくて動物のもの。丁度、サルサと同じくらいの大きさだ。

タケトは、日本では見慣れ無い動物に声を無くした。

「ん？兄貴、コイツ起きてるみたいだぜ？」

タケトの目の前にいた動物が、牙呀が言った。

隣にいた牙磨が、タケトの方に振り向いた。タケトの瞳に、その姿がはつきりと映る。

大型犬くらいのネコ科。まだ若いからなのか、その鬣は薄い。ギラリと光る金色の瞳が六つ、タケトを睨んだ。

「すまないな。急にこんな所に連れて来てしまった」

牙磨が言った。

「・・・へ？」

「・・・へ？」

牙磨の笑顔に、タケトは拍子抜けした声を口にした。

「そう言う俺もそうなのだが・・・。」

「あの方から連絡があつてな・・・。残念ながら、貴方は必要無いらしい」

「な・・・何言ってるんだよ！連れて来たのはそっちだろ！！」

少々、怒鳴るようにタケトは言った。

牙磨は笑顔のまま、ピクリとも表情を変えようとはしない。

まるで、当然だと思っっているようだ。

「流石、犬なんかの主人をしてるだけある」

牙磨はそれだけ言って、後を牙呀に頼んだ。

獣人型に姿を換えた牙呀は、タケトの胸ぐらを掴んだ。

「ヒヤッハハハ！」犬みたいによく吠える”つてよ!!!”

タケトを睨む瞳は恐ろしい。しかし、それから目を反らすことはしなかった。

それどころか、逆に牙呀を睨み返した。

「いゝ度胸してんじゃんか……。兄貴！コイツ逃していい？」

その牙呀の言葉には反応を見せる。呆れたように振り返った。

「そんな顔すんなよ。『月』を持つ奴を追いかける……。楽しいと思わねえ？」

牙呀は面白そうに言うが、牙磨はため息を吐いて呆れていた。

「好きにしる。あの方がなんて言うことか……」

心配もしていたようだ。

「んじゃ、記憶を消させてもらっせ」

牙呀はそう言っつて、タケトの頭を掴んだ。眼力から逃げられないように……。

……はて？

前にも、同じことがあったような……。

そんなこと思っている間にも、タケトの記憶は消されていった。

タケトの意識は薄れ、目の前が暗く静かになった……。

……ト。……ケト。

誰かの声がした。

聞き覚えのある、声。この声を聞くと……。安心する。

そう思いながら、タケトは目を開けた。

「タケト!!!」

「うわあっ!!!?」

物凄い形相で、自分の名前を呼ぶサルサに驚きを隠せず声にしてみました。

サルサはムツとして、獣人型になるとタケトの両方の頬をつねる。

「この馬鹿タケト」。心配してる者に向かって（怒）「

よく見渡せば、サルサの他にもキールとか銀星とかいた。

「その辺にしておけ、何より無事でよかったじゃないか」

銀星はそう言っつて、サルサを落ち着かせた。素直にその手を離す姿を見て、満足気に頷いた。

タケトは、とりあえずお礼と謝罪をした。

「で？何を聞いて来たのだ？」

サルサの質問に、問われた本人はキョトンとしていた。

「え？」

「・・・え？」

タケトの返事を、オウム返しに言う。

それを見た、キールと銀星は冷や汗を額に流している。

うん・・・。気持ち分かるよ。キール、銀星。

ちなみに、ここは公園の近くにある空き地。タケトを探していた

サルサ達は、ここでタケトを見つけたのだ。

「なるほど・・・。」 奴等”が簡単に『月』を返す訳が無いってことか・・・。」

キールの言葉に、どういうことだ、と怒鳴る。

キールは再び冷や汗を流しながら、落ち着け、となだめた。

「よ〜つく、考えてみる？」 奴等”はタケトに用があつた・・・。

でも、現にタケトはここにいるだろ。何か知られるといけないうことを口にしてしまったと考えるのが適当だと、俺はそう思うぜ？」

キールの力説（？）に、サルサは納得せざるを得なかつた。

タケトの記憶はそこまで失つてはいなかつたようだ。

「あの方・・・。」

タケトがそう言ったからだ。

「・・・は？」

その言葉に反応して、三人が声を揃える。

タケトはただ、頭にポントと浮かんだ言葉を口にしたただけだ。

深い意味は無い。

再び、サルサはタケトに詰め寄つた。

「ち、近いよサルサ・・・」

詰め寄るサルサを押さえ付けて、タケトが言った。  
ついでに息も荒い。目も血走ってる。

正直、うざりたい。

「おい、タケト。」 奴等” はあの方って言ったんだな？」

キールの質問に、タケトは黙って頷いた。

すんなり、では無く少し考えながらだったが・・・。

キールは、独りで確認して独りで納得すると、三人に背中を見せた。

「月神君！？何処に・・・？」

「帰って寝る。今日はしんどい」

スタスタ・・・と去って行くキールの姿に絶句する三人は、呆れていた。

銀星も、カオルが心配するから、と帰って行く。

とうとう、二人になってしまったタケトとサルサは、ただ呆けていた。

暫く黙っていた二人だったが、タケトがゆっくりと口を開いた。

「・・・帰ろっか」

サルサは、犬型に換わると黙って頷いてタケトに寄り添って帰った。

## 自宅

二人が帰り着いた瞬間、目が合った三人は沈黙した。

「・・・」

タケトとサルサの目の前には、寿文の首筋を狙うキールの姿があった。

その本人の寿文は、酔っ払って気付いていない。

狙っているキールは、黙っている二人を見て手を振る。

「・・・よっ」

ゴツッ！！

「イツ・・・テエなあ！おい！！」

キールは頭を押さえて言う。  
それもそのはず。

サルサが自分に買って貰った犬小屋を、キールの後頭部に投げつけたのである。

サルサが自分に買って貰った犬小屋を、キールの後頭部に投げつけたのだ。

「何しやがるあ！！」

「それは貴様の方だ！」

キールは寿文を抱えながら怒鳴る。サルサは小声で怒鳴りつけた。その弟のタケトは、ただただ、沈黙していた。

「じゃかあしい！トマトジューズだけで腹が足りるかあ！！」

そうだった。キールって、コウモリだったんだっけ・・・。  
と、俺とサルサとタケトは思った。

「じゃあ、やつぱりあの事件の犯人は貴様だったんだな！」

サルサは、短い前足をビシッとキールに向けて言った。

その瞬間、キールの首筋に青筋が浮かぶ。

そとと怒っているようだ。

「だ・か・ら！オレは吸血コウモリじゃねえって！！」

あゝ、だいぶ紹介が遅れましたが・・・キールは吸血コウモリではありません。あのブタさん顔の花コウモリです。

（本当なのは知らないけど）花コウモリも少しだけ吸血するらしいのです。

キール説だけど・・・。

あの夜、トマトジューズだけで空腹に我慢出来なかったキールは、公園の花の蜜を吸いに行っていたらしい。

これも、キール説。

「あー、邪魔されると余計にしんどい・・・。も〜寝る」

そう言ったキールは、小さな小さなコウモリに戻ると部屋の隅で

逆さになって、静かに眠った。

タケトとサルサの二人は、新たなキールの姿を知った。・・・よ  
うな気がするのだった。

こうして、ようやく長い長い二日

間が終わった。

んん！？二日間？

そうなのである。実は、タケトは気を失って丸一日過ごしていた。  
記憶を消されてから、数時間。おかげで、時計の針は既に十二と  
十二を示している。

タケトは、今日が日曜でよかった・・・と思うのだった。

FILE 6 : 『月』 (前編) (前書き)

えゝゝゝゝ。ある事情により、前編・後編でお送りします。

FILE 6 : 『月』 (前編)

学校・教室

昨日・・・タケトが”奴等”の所から帰って来てから、まあた、いろいろあった。

原因は、キールの行動。そして、サルサの発言。

タケトが暗い顔で、ため息をつくとき背中をポンツと叩かれた。

「どうしたの？先刻からため息ばかりついて・・・。悩み事？」

久々(?)に登場、北原美也だった。

美也にくつついて、ミレイの姿もある。

「どーせ、サルサと転校生のことでしょ？」

呆れたようにミレイは言う。ズバリ的中していた。

タケトはまた、ため息を・・・。

キールとサルサの姿を見て、吐き出した。

美也もそのことを察したのか、困ったように笑った。

というより、笑うしかなかった。

おそらく、昨日のことが原因だろう。教室の真ん中で喧嘩している。

キールは、訳の分からない方言まで使って。サルサは、それが分からなくて怒鳴り散らす。

「わっどんな！おっどんこっ、きさん言うな！！」

訳：お前なあ！オレのこと、貴様って言うんじゃねえ！！

「何言ってるのかわからんっ！！」

「こん、どんた馬鹿すったん！！おっどんこっ、きさん言・う・な

！！」

訳：この、大馬鹿野郎！！オレのこと貴様って言・う・な！！

え〜・・・キールが口にする方言は、俺の地元のとほぼ同じです。

こんな都会の奴に通じる訳無いのだが、キール本人は怒りのあまりそのことを忘れてるようだ。

「いい加減、普通に喋ったらどうだ!!」  
先程から痺れを切らしていたサルサが、更に痺れを切らして言った。

流石に疲れたのか、二人は息を切らして暫く睨み合った。  
キールは、サルサよりも早く呼吸を整えると大きく、深呼吸をする。

そして……。

「せからしかー！ー！」

訳：うるせえー！ー！

と、大声で言った。

お前の方がうるせえー！！

ベチツ！×2

あまりの五月蠅さに、今先刻来た

先生の攻撃だった。

教卓の上に持って来た、クラス名簿を二人の頭めがけて投げつけたのだ。

本人は角を当てるつもりだったが、投げてる間に威力は弱まり”ベチツ”という、変な当たり方をしてしまったのである。

「授業の邪魔！出て行きなさい！！」

先生は、心の底からそう思ってた。二人は言われるがままに、廊下へと姿を消した。

その瞬間、クラス内にホツとした空気が流れた。

なんかこう……”やっと静かになつた”的な。

そんな一日が流れつつあった……。

学校・校庭（樹の側）

キールを見張るのに飽きたサルサは、紅葉の樹の側に座っていた。  
キールはその反対側に座っている。

そんな二人を教室の窓から見守っているのが、タケトだった。

「心配？」

タケトの後ろから声がして、振り向くとそこには美也がいた。

タケトは、驚いた様子も無く、うん、と答えた。  
美也はタケトの隣に移動する。

「昨日、何かあったの？」

タケトはまた、うん、と答える。

サルサとキールに、何の変化も無い。

タケトは、ため息をつく。

「何を考えてんだろ・・・サルサと月神君」

心の声を口にするタケトを見て、美也はクスツと笑った。

静かに声をだして、きつと・・・と言っ。

タケトは、美也の口調が何時もと違うのに驚いた。

「きつと・・・おんなじこと考えてるよ。」 タケト君を、守る”  
つて」

美也の瞳は、青々とした空をずつ・・・と眺めていた。

その一瞬、瞳を見ていたタケトの『月』が微かに反応した。

それに、キールが反応した。

「っ!？」

キールは、すぐにタケトを見た。

「この反応・・・っ! 『月』の!? サルサ以外にも反応するのか？」

サルサは、辺りの異変に気が付いた。自分達以外の時間が止まっているような・・・、そんな感じがした。

「な、何なのだ!？」

そのサルサの質問(?)に、異変を起こした張本人達はそれぞれに笑って答えた。

「また会ったわね 犬の獣人族さん」

「弱そおな面してんなあ」

サルサは、女の子の方の声にビクツと反応した。

そう、陽気なのにゾクツとしてしまう聞き覚えのある声。

「き、君達はっ!？」

タケトは、見覚えのあるその三人の姿に思わず声を出してしまっ  
た。

その三人は、風に鬣を漂わせて仁王立ちでタケトを見た。鬣の三人、牙磨・牙呀・牙羅の視線が揃ってむいたのだ。タケトは思わず、身体を請わばらせてしまう。

「見つけたぜ？『月』の能力者あ……」

サルサは、バレないようにタケトの所に行く……はずだった。だが、それは牙羅によつて防がれてしまう。

彼等の得意な眼力である。

「邪魔、しないでね？死にたくは無いでしょ」

「ぐっ……！タ、タケト……」

彼等はサルサの真後ろにいるキールに気付いていない。

何せ、紅葉の樹で隠れてしまっていたのだから。

それをいいことに、キールはタケトの目の前へと飛んだ。

「っ、月神君！」

キールは牙磨達の方を睨み続ける。彼等も、キールの正体に気付いたようだ。

「よぉ……暫くじゃねえか。会いたかったぜえ……！」

「誰かと思えば……」

牙呀と牙羅の後ろにいた牙磨が、二人を割いて出て言った。

その二人とは違って、鬣がしっかりと付いている。

そんな牙磨に向かって、キールは一步も引こうとはしない。それどころか、先刻から放送禁止用語を口にし、挑発しているではないか。

「デメエなんざ、\*\*\*\*\*の\*\*\*\*\*だ……！」

誰か聞いても腹が立つような言葉だ。

だが、牙磨の表情は無表情のままだった。聞いているのか、聞いていないのか分からない。

あ、よく見たらオデコに青筋が……。

「ふっ……、まあいい。我々が狙っているのは『月』を持つ者だけ……。退いてもらおうか？」

牙磨の瞳が、怪しげに輝いた。あの強力な眼力である。

キールはその場を離れ……ない。

あれ？

なんで離れないの？

「忘れたか？オレが、”コウモリ”ってこと……」

「ご主人様っ！」

牙磨の眼力が消えたのと同時に、キールの言葉とミレイの声が聞こえた。

牙磨は、眉間にシワを寄せて悔しそうに舌打ちした。

「牙呀！牙羅！さつさと『月』を奪ええ……！」

牙磨がキレた。

その顔は、荒ぶる獅子のよう……。

「どけっ！『月』を超越せ……！」

牙磨の怒りにこれ以上触れないよう、牙呀と牙羅は必死だった。

「一度は手放した『月』をまた盗る気か？」

タケトを蒲って、キールが言うのと牙呀が鼻で笑った。

「ばあくか、犬の『月』はいらねえ……！」

「あの方が欲しいのは、猫の『月』……！」

二人がそう言っつて、手を伸ばしたのはタケトではなく、北原美也の方だった。

FILE7：『月』（後編）（前書き）

え、お気づきかと思えます・・・。ネタ切れでこういう形をとりました。急いで投稿したので、変な日本語があるかもしれません。あと、キールの”オレ”が”俺”になっていました。ごめんなさい

牙呀と牙羅の二人が伸ばした手の

先には、タケトではなく北原美也がいた。

「な、何い!？」

美也は恐ろしくて目を瞑った。

そんな美也を守るように、ミレイが盾になる。

同じネコ科の動物、犬のように傷付ける訳にはいかない。

そう思ったのか、二人の手が一瞬戸惑っていることを表した。

「ご主人様！逃げて！」

ミレイは二人を睨みながら言う。

美也は、逃げようとした。・・・が、それは出来なかった。

「牙磨！ちっ・・・何時の間に!！」

先程までキールの目の前にいたはずの牙磨が、何時の間にか美也の目の前に立っていたのである。

キールは焦って、そっちに向かった。

「サルサっ!！」

何かしなきゃ、と考えていたタケトは『月』を輝かせてサルサの名を呼んだ。

タケトの声なのか、『月』の力なのか、とりあえずサルサの身体は牙羅の眼力から逃れることが出来た。

「タケトっ!！」

「俺は大丈夫。それより、美也ちゃんを・・・」

真っ先にタケトに向かうサルサ。そのサルサに、タケトは美也を守るように言った。

サルサは、牙磨に蹴り入れて美也から注意を引き付けようとした。だが、相手は牙磨だ。

サルサの蹴りはあっさりかわされ、逆に殴り返されてしまう。

その隙に、美也の腕を掴むとグイッと引き寄せた。

「帰るぞ」

牙磨は、嫌がる美也を静かにさせるとそれだけ言って去って行く。  
「ご主人様っ！」

ミレイがそう口にした時には、もう遅かった。

牙磨に続いて、牙呀も牙羅も去って行った。

ガンッ！！

メキィ・・・！！

「くっそお・・・」

キールは、自分のふがい無さに悔いて白い壁に拳を撃ち込んだ。

砕けたような音がして、白い壁はくつきりキールの拳を型どった。

そして・・・。

「あああああああ！！！！」

と、叫び続けた。

校庭（夕方）

美也が連れ去られてしまっってから、三時間が過ぎていた。

あれから、校庭に出て三時間丸々そこで過ごした。

午後の授業も、HRもすっぱかしてだ。

「・・・ねえ？」

一番、落ち込んでいるはずのミレイが口を開いた。

納得いかないのだろう。自分のパートナーが連れ去られてしまっ

たということに・・・。

「・・・ねえってば！！！」

悲しみと、不安と、今この瞬間の沈黙を打ち破りたくてミレイは

キールを睨んで言った。

「・・・」

それでも、キールは黙ったままだった。

「なんとか言いなさいよ！！！」

沈黙し続けるキールに、ミレイは己の爪を喉元に当てた。

キールの表情は変わらない。そして、覚悟したかのように瞼を閉じた。

ミレイは、ふざけないでよ・・・、と呟く。

そんな彼女の手は、小刻みに震えていた。

「スマン・・・。猫の『月』を狙っていたことは、予想外だった」  
悔しさのあまり、ずっと叫んでいたキールの声はかすれ、悔しさのあまり、その声は震えていた。

「その、猫の『月』とは何なのだ？」

タケトの”匂い”を嗅ぎとって、サルサが言った。

キールはかすれた声のまま答えた。

「獣人族の中には、『月』を力に変えることが出来る者が存在する・・・。それが、犬と猫の獣人族だ。『月』の力は、『情』の塊。だから、それを手に入れた者は最強になる。”奴等”の言う、あの方は同科である猫の『月』を狙ったんだ・・・」

タケトは、サルサと共に首を傾げる。

俺も、首を傾げる。

そもそも、『月』に犬とか猫とかあるの？、ということに疑問を抱く。

キールは、タケトの”匂い”を嗅ぎとると驚いたように目を丸くした。

「し、知らなかったのか？『月』が犬と猫、同じだってこと・・・。真剣に聞いていたタケトとサルサ、ついでにミレイも首を縦に振った。」

てか、そうなの？

キールは、嘘だろ？、と飽くまで信じようと思っていないらしい。

「お前ら、『月』が犬だけの物だと思ってたのか・・・」

タケトとサルサ、ついでにミレイも再び首を縦に振った。

キールは呆れて、手で顔を押しさえた。まさに、呆れているという格好だ。

キールは、ミレイの爪をどけて、いいか？、と語り始める。

「お前等が知りたいのは、犬と猫が持つ『月』だろ？犬と猫の先祖は、同じ動物だったからその力が分け与えられたんだ・・・。」

「つて、聞いてるか？」

タケトはともかく、サルサとミレイの目は点になっていた。

キールは、二人の目の前で手を振ってみる。暫くして、それに反応した。

「……嘘だあ」

二人は、冷や汗垂らして言った。

キールも冷や汗を流す。

「嘘ついてどうすんだよ……」

二人は、お互いに”猫と同じ？””犬と同じ？”と考えているような顔をして苦笑した。

タケト、そこでメモるな！！

キールは、タケトにも突っ込みを入れる。

「そういえば……なんで、美也ちゃんを？」

タケトは、何故美也でなければいけなかったのか、ということに疑問を持ったのだ。

キールは、タケトをじっと見て答える。

「原因は……タケト、お前だ」

驚くタケトを目の前に、キールは話を続けた。

「少なくとも、北原はお前を友達以上に意識していた。そして、お前という異色の『月』との接触。その全てが、まだ未完成だった北原の『月』を完成させたんだ」

タケトに言葉は無い。ただ、驚いている。

ミレイも、サルサも、犬と猫の先祖が同じなんてことも忘れて驚いた。

サルサは再び聞く。”奴等”の正体について。

「言っただろ？」奴等”は『王』だって」

「それだけで分かるか！そもそも、何故『王』なのだ！！」

あゝ、再びサルサとキールの口喧嘩が始まる……。

ミレイも止めに入るが、巻き込まれてしまい二人から三人に増える……。

それどころでないというのに……。

「猫の『月』って、どこに出来るの？」

タケトの疑問が、三人の喧嘩を止めた。

「おい、タケト！お前、あの日どこにいた！？」

キールが言った。

記憶を消されたタケトが答えられるはずも無く、ただ首を横に振った。

キールは、思い出せ！、と言う。だが、それだけで思い出せる訳が無い。

キールは、タケトに歩み寄るとお互いの額に指を当てる。

「タケト、あの日のことを考える……。これだけはやりたく無いが……。今は時間が無い」

タケトは、あの日のことを思い出せるだけ思い出している。

” 奴等 ” の本当の姿のシルエツト、あの方と語る牙磨の姿、そして、あの寒い場所。

タケトも、キールも集中している。

それほど時間はかからなかったが、明らかにキールは疲れていた。肩を上下に動かし、その息遣いも荒くなっていた。

「わ……。分かつ……。た。急ぐ、ぞ」

キールはフラフラになって歩む。

「だ、駄目だ！そんなにフラついてるのに！！」

タケトは心配して言う。だが、キールはその言葉の後、タケトの胸ぐらを掴んで睨み付けた。

「ふざけんな……。」

ほとんど、かすれて聞こえないくらいに呟いた。

「ふざけんな！お前も原因だって言っただろ！！その本人が諦めてんじゃねえ！！！」

キールはそれだけ怒鳴って、タケトから手を離す。そしてまた、フラフラと歩み始めた。

だが、疲れきっているキールは二、三步進んで膝をついた。

疲れている、というより体力を消耗している状態に近い。

そんなキールの腕が、身体が、フワツと浮く。

「行こう。みんなで」

タケトは決意した。

それに納得したように、サルサとミレイもキールを支える。

「おう、行くぜ！」

タケトとキールの二人は、お互いを見つめて自信有り気に笑った。

だが、その笑みはすぐに消えた。

キールは、焦った様子で三人に伝える。美也の視力が無くなり、

闇だけが広がることになると……。

**FILE 8：雅王見参！キールの闘い（前書き）**

多少、？な部分もありますが、そのような感想でもいいので、これからも感想・評価お願いします。

## FILE 8：雅王見参！キールの闘い

???

ここは、以前タケトを連れて来た場所。

「どうやら牙磨達三人は、ここで”あの方”と呼ぶ者を待つようだ。

「起きろ。『月』を持つ女」

そう言ったのは、牙磨だった。

その瞳は冷たく、鋭く、痛かった。

美也は、無理矢理起こされてどこか疲れた様子だった。

目を開ければ、そこに牙磨達三人が見張るように囲んで立っていた。

「我々はお前の『月』をあの方に差し上げなければならぬ」

偉そうな口調で、牙磨が言う。

「こんなことして・・・貴方達、どうも思わないの!？」

美也は、牙磨以外の二人に言う。

自分達の兄弟が、どんな恥ずかしいことをしているのか、と教えるために・・・。

だが、二人はそれを嘲笑うかのような素振りを見せる。

これっぽっちも、恥ずかしい、等とは思っていないようだ。

「なぐに言ってるの？兄さんはあの方の次に尊敬してるわよ」

「あの、可愛い子の飼い主とは思えねえくらいお転婆だな」

そう言って、二人はケラケラと笑い声を高々と上げた。

「牙磨も笑っていたが、やがて静かになる。

「牙呀と牙羅にも、静かにするように伝えた。

「来た・・・」

牙磨が呟くように言う。

そこには、金色の毛に身を包んだ男が歩いていた。

全身が金色のその男は、鋭い金色の眼孔で美也を・・・美也の瞳を睨んだ。

「お待ちしていました。雅王様<sup>ガオウ</sup>」

男・雅王は、いい瞳だ、と顔をニヤケさせた。  
金色の眼孔で、美也は怯えていた。だが、それをグツと我慢して  
雅王を睨み返す。

全身が震えているのが分かった。

「さあ、私にその『月の瞳』を寄越しなさい」

雅王は、紳士的な口調で優しく、エグい言葉を口にした。

美也はギョツと瞳を閉じて、雅王から顔を背けた。

「そんなことをしても無駄ですよ。『月の瞳』は貴方の眼<sup>まなこ</sup>では無い  
のですから」

瞳を閉じたままの美也の顔を、自分の方に引き寄せる。

美也は嫌がっていたが、雅王の力は思っていたよりも強く、今度  
はしっかり顔を向かされてしまった。

雅王は、美也の瞳を片手で隠す。

「じつとして下さい・・・」

美也は、違和感を抱いた。

雅王が触れている所が、引っ張り出されるような違和感。

「や・・・やめ」

美也は、必死に言う。だが、雅王は聞いちゃいない。

雅王の片手が、白く輝く。もう少して『月の瞳』が取り出される。  
・・・そんな時だった。

「待てえーっ!!!」

獣人型になつたサルサに捕まったタケトが叫んだのだ。

サルサが、”マーキング”で雅王と美也を引き離す。

ミレイが美也を抱き寄せてその場を離れ、銀星が雅王達四人に向  
かって”魂の矢”を放った。

「くっくっ・・・!!」「」「」

四人は、ばらばらに別れて銀星の攻撃を辛うじて避けた。

「っらあ!!!」

銀星の後方から、勢いよく飛び出した奴は金色の雅王を狙って、

鋭い爪を振り降ろした。

雅王は、それを避け紫色に輝く髪をなびかせるキールの頬を平手で叩いた。

そんな雅王の頬からは、真つ赤な血を流していた。

「つう……！また、君ですか。」コウモリ”風情が舐めた真似を……」

キールは、雅王を睨み、睨み、睨み続ける。

それはもう、”憎しみそのもの”と思えるほど……。

「うっせえ……。オレは、テメエ等を殺す！それだけだ！！」

再び、キールが雅王に向かって行く。が、牙磨達三人がそれを阻止する。

だが、サルサ達もただ見ているだけでは無い。

キールと牙磨達の間に入ると、三人の攻撃を阻止する。

キールは、雅王を狙って飛び出した。

「がああああつー！！」

キールは、黒い劔（やく）を振りかざし切り裂く。

雅王は、筋肉で固めた腕を盾にそれを避ける。

もう一度、切り裂く。そして、避ける。

暫く、それが続いた。

攻撃を避ける雅王に比べて、攻撃を仕掛けるキールの方が明らかに疲れている。

よく見れば、キールが持つ黒い劔は先程よりも小さくなっている。

それに気付いた雅王が、鼻で笑った。

「馬鹿な奴ですね……。自分の血を武器にするなんて。そのまま続けられ、君は死にますよ？」

雅王は勝利を確信したのだろう。

キールの攻撃を余裕でかわして、吐き捨てるように言う。

「……知るかよ」

かすれた声で、キールは言う。

口の端が吊り上がっている。

「テメエ等を倒せるなら、オレの命なんて……どおでもいいんだよおおっ!!!」

キールは雄叫びを上げて、小さくなった劔を振り抜いた。

「くっ……！眼力が効かない相手は面倒ですね。いい加減、諦めなさい!!!」

何時の間にか上がっていた月が、血にまみれた金色の獅子と、死人のように崩れる紫色のコウモリを蒼い光で哀しそうに照らしていた。

雅王は、立ち上がることの出来ないキールの背中を踏み、金色に光る眼孔で睨み付けていた。

雅王は、立ち上がることの出来ないキールの背中を踏み、金色に光る眼孔で睨み付ける。

脚の爪が、キールの背中を傷付ける。

声にならない叫びを上げる。

「弱いくせに、私に齒向かったりするからですよ？弱いくせに……弱いくせにっ!!!」

雅王は、ザクツとキールの背中を踏み、裂く。

それでもキールは立ち上がるようにする。

雅王は、踏む。

キールが二度と起き上がれないように。

何度も踏んだ。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も……。

キールの背中が、血で真っ赤になるまで……いや、それ以上。それでもキールは立ち上がるようにする。

「いい加減にい……しろおおっ!!!」

これが最後になるだろうと思えるほど、雅王は脚を降りきる。「がああああっ!?!」

驚いて叫びを上げたのは、雅王自身だった。

キールは、振り降ろされる脚と反対側の脚に噛みついていていた。

ジュツ……ジュウツ、と音をさせて雅王の血を吸う。

その瞬間、キールの身体に異変が起きた。

先程まで踏み付けられていた背中への傷は、見事なまでに塞がっていた。

それだけでは無い。

キールの持つていた、黒い劔も先程より大きく、太くなっていたのである。

「くっそ不味い血だなあ・・・」

吸い上げた血を、全て呑みほしてキールは言った。

蒼い月に照らされたその姿は、まるで悪魔と化したようにも見えた。

キールは、今度はオレの番だ、と呟き劔を構える。

脚に気を取られていた雅王が、痛いはずの脚で立ち上がり防御の姿勢を見せた。

「両親の仇だ！あの世に行きやがれえ！！」

キールは、大きくて長い劔を振り上げる。

そして、その雄叫びのような怒りを上げ、一気に振り降ろす。

「月神君っ！駄目だ！！」

タケトの声が、キールの手を止めた。

キールが、何故、と聞くことは出来なかった。

何故なら、隙だらけのキールの胸を雅王の金色の腕が貫いていたからである。

声をかけたタケトも、それに反応したキールにも言葉はなかった。  
。。。

**FILE9：サルサ組VS牙磨組（前書き）**

感想・評価待っています

## FILE 9：サルサ組VS牙磨組

サルサ・銀星・ミレイの三人と、牙磨・牙呀・牙羅の三人は、未だに動かず力比べのままだった。

サルサ達三人と牙磨達三人、計六人は一度離れた。

「お前達・・・『月』を手に入れてどうするつもりなのだ？」

サルサが、向かい側にいた牙磨に聞く。

すると、牙磨は鼻で笑う。

他の二人も、サルサを嘲笑った。

牙磨の代わりに、牙呀が、バカだろお前？、と答える。

「雅王様がこの世で真の『王』になるために決まってるんだろ？」

真の・・・王？

と、サルサは首を傾げる。

おそらく、動物の『王』でもあり人の『王』にもなるうということなのだろう。

百獣の王と言われるだけはある。なんという、自惚れ・・・。

「アタシ達は、その手助けに来ただけ」

牙羅も言った。

「ご主人様の『月』は捕らせないっ！」

ミレイが必死になって言う。

その姿に、三人は可哀想な目でミレイを見た。

「貴方も我々と同族だろう？何故、そんな奴等と一緒にいる？」

最後に牙磨が言った。

何時の間にか上がっていた月が、蒼く輝き牙磨達三人の身体を金色に照らした。

その姿は、美しいと感じられる。

「あの、犬の大量死はお前達の仕業なのか？」

銀星は、今まで気になっていた犬の大量死のことを聞いた。

銀星は、キールが犯人では無いと思っていた。だが、それだと別

に犯人がいることになる。

それが、先程から頭の隅っこに引っかかっていたのである。

牙磨達は、また笑った。

「ほとんどは雅王様だ。我々は、その犬達を殺すだけ」

そう、牙磨が答える。

笑いながら、当たり前のように答えたのだ。

これに、サルサ達がショックを受けない訳がない。

「貴様等・・・許さぬ！」

サルサは、至る所に仕掛けたマーキングに命令する。

”包み込め！”と・・・。

すると、サルサの周りにある草や木々達が牙磨達三人を包み込もうと伸びていく。

あつという間のこと、牙磨も牙呀も牙羅も何も出来ずそのまま包まれてしまった。

やった、とサルサは確信する。

だが、それも叶わない。

「こんなものが・・・俺様達に効くわけ無えだろお！！」

ザシュツ・・・！！！！

サルサの命令は、意図も簡単に碎

け散った。

「なら、実力戦ね・・・」

「じゃ、アタシ黒い犬コロと」

ミレイが覚悟して言うと、牙羅が明るく陽気に言った。

しかも、サルサを指名して。

「じゃあ、俺様は可愛い子ちゃん」と

「では、銀色の貴方。お手合わせを宜しく・・・」

牙羅に続いて、牙磨も牙呀も言った。

心なしか、牙磨達三人は楽しんでいるように見えた。

サルサ達は、身構えて待った。

先に仕掛けたのは、牙磨達の方だった。

タケト&美也

タケトは、美也と二人でサルサ達とキールの闘いを見守ることしか出来なかった。

「・・・止めさせなきゃ」

タケトは呟く。

それに、美也も同意する。

しかし、その術は無い。

「こんなの・・・間違ってるよ」

「元は同じ仲間だったはずなのに・・・」

二人は、それぞれに呟いた。

何故、こんなことになってしまったのだろうか？

何故、犬族と猫族は別れてしまったのだろうか？

それは考えてもきつと分からない。

だが、この闘いだけでも止めなければ・・・。

二人はそう考えていたのである。

「止めよう」

二人は、それぞれの『月』を輝かせてほぼ同時に言った。

「ぐあつ・・・!!」

サルサは、牙羅の鋭い爪で傷付けられた。

明らかに、年下の・・・しかも、雌であるはずなのに。

眼力は使われていない。

百獣の王・ライオンであるせいなのか、力の差がありすぎるのである。

それは、ミレイも銀星も同じことである。

「弱い・・・。弱すぎる・・・」

呆れたように牙磨が呟いた。

そろそろ、とどめにしようと思っているのか？

牙磨が爪を鋭く尖らせて、倒れた三人に近づく。

だが、牙磨が彼等を傷付けることは出来なかった。

「やめるー！ーっ！！！！」

タケトの声が、『月』の光と共にサルサ達三人を包み込んで、牙磨の爪から守った。

その光に触れた牙磨は、反射的に手を引いた。手は、火傷で皮膚がただれていた。

流石の牙磨も、苦痛の表情を見せる。

「くう・・・っ!!」

「兄貴!？」

「兄さん!？」

牙磨の表情を見て、牙呀と牙羅の二人が驚きの声を出した。はて？

こんなことが前にもあったような・・・？

あの時、サルサが悪サル・・・もとい、人狼族ワウルフと闘った時と同じだ。

「・・・すごい。こんな効果があるなんて・・・」

光を放った本人であるはずのタケトが言った。

タケトも同じことを思ったのだ。

同じ獣人族とは言うものの、一度邪悪な感情に取り込まれた彼等にも、『月』はちゃんと効果を見せた。

それに包まれたサルサ達に、敗北の二文字は無くなった。

”形成逆転”とは、まさにこのこと。

牙磨達三人に、成す術は無くなったのである。

「観念するのだ!」

「あんた達の負けよ!」

力がみなぎる。

タケトの光と共に、サルサとミレイが言う。

三人は、地面に寝そべった。

どうやらもう、抵抗する気は無くなったようだ。

牙磨は、”あはは”と力無く笑った。

最後の最期で、『月』の力に裏切られるとは・・・。ははは・・・

あの光は、タケトだけの力では無い。美也の『月』の力も加わっていた。

先祖は同じ。

だから、タケトと美也は二つの『月』の光を生み出したのだ。別れてしまった二つの『月』の力。

それは、タケトの想像より遙かに上回っていた。

「・・・だが、もう遅い。雅王様が我々の宿命を果たす」

呟く牙磨に次いで、牙呀が言う。

「逆らっても無く駄。あのコウモリの両親のように殺されるだけだよ・・・」

サルサ達は慌ててキールを見る。

そこには雅王に踏み付けられ、精一杯起き上がろうとしているキールの姿。

その光景が、長く、長く続く。

その時、牙羅が悲しそうに口を開いた。

「その時から、雅王様もアタシ達も変わっちゃった・・・。人間とコウモリのくせに逆らうから・・・雅王様、殺しちゃった」

サルサ達は言葉を失う。

銀星は、悲しみに震えた。

知っていたのだ。

キールが、人間でも獣人族でも無いことを・・・。

キールが、死ぬつもりだということを・・・。

「雅王を殺せば、キールも死ぬだろう・・・。でも、俺は・・・あいつを止められない」

銀星が悔しそうに言った。

タケトが、信じられない、と思っているのにも関わらずキールは黒い剣を振り上げていた。

「月神君っ！駄目だ！！」

死んで欲しくなくて、キールに聞こえるようにタケトは叫んだ。

手を止めたキールの姿に胸を撫で降ろすタケトだったが、次の瞬

間言葉を失った。

雅王の腕が、キールの胸を貫いていたのである。

そこに、勝ち誇るように笑う雅王と無表情のまま倒れるキールの姿があった……。

**FILE 9：サルサ組VS牙磨組（後書き）**

！ 次回は、外伝・キールと銀星の出会いをお送りします。楽しみに

FILE10：【外伝】思い出（前書き）

今回は、銀星とキールの外伝となります。本編と関係ない・・・というわけではないのですが、ご注意ください。感想・評価待っています

## FILE 10：【外伝】思い出

感じたことの無い街……。

感じたことの無い人……。

感じたことの無い空……。

光を失った一匹の犬が、灰色の空の下を歩いていた。

銀色の毛並、しかし、永年旅をしていたせいか薄く汚れていた。

少し、湿った空気だ……。

雨が降りそうな感じがする。

とか、なんとか言ってる内に一つ、また一つ雨が降る。

銀色の犬・銀星は、近くに雨宿り出来る場所を探す。

ただ一ヶ所だけ、雨の音が鈍い場所があった。

地面以外の何かに、雨が落ちている証拠である。

「ん？誰かそこにいんのか〜！」

銀星が雨を避けていると、後ろから声が聞こえた。

銀星は犬だ。

犬が喋る訳にはいかない。

しかし、無言でいるのも気が引ける。

銀星は、キュ〜ン、と犬語で答えた。

どうやら、相手は鉄のトタン板の向こう側にいるらしい。

「ひっでえ雨だよな。これじゃあ、”奴等”の”匂い”が消えちまわ〜」

直接的に話されている感じがしない。

「なあ？お前、なんで逃げてるんだ？」

トタン板の向こう側にいるそいつは、銀星の心を見透かしたように言った。

そいつは、向こう側で笑っているようだった。

「隠すなって、ど〜せお前も獣人<sup>ワイルドハーフ</sup>族なんだろ？」

「……ああ」

そいつは”月神”と名乗った。

銀星が知っている奴では無い。

しかし、月神は知っていた。

銀星が獣人族ということも、人狼型ワウルフになりたくなくて主人から離れていることも・・・。

それでも、その主人のことをずっと見守っていることも・・・。

「何故、そのことを!？」

月神は怪しげに笑って、まだ知っていることを口にする。

「まだまだあるぜ? 同じナイトウェアで同じベッドで眠ったり、家じゃ”男前”って言われたり」

・・・事実だ。

銀星と主人しか知らないことを、月神はペラペラと語る。

銀星は恥ずかしくなって、言葉を無くした。

「それから・・・」

「もういい! それ以上言うなっ!!」

銀星は、思わず大声で怒鳴った。

一応、すまん、と謝ったが少し気にしているようだ。

月神は、ハハハ・・・、と笑いながら銀星に姿を見せる。

獣人族ではなかった。だが、ただの人間でもなかった。

驚いて言葉の無い銀星に、月神は笑っている。

そんなに面白い顔してるのだろうか?

「なるほど。永年、獣人族してるだけはあるんだ」

月神は感心して言った。

「お前は・・・何なんだ?」

永い時間生きて来たが、月神のような奴を見るのは初めてだ。

いくら考えても分からない銀星は、恥を偲んで聞いた。

聞かれた月神は、惜しみなく答える。

「オレは、”コウモリ”だよ。獣人族でもない、人間でもない。仲間外れの”コウモリ”」

銀星は、目を丸くした。

そこにいる月神は、立派な人間。しかし、獣人族……。自分を”コウモリ”だと言う月神は、どこか悲しそうに思えた。「お前、混血・・・か？」

月神は、語名答、とウィンクした。

そう、月神はコウモリの獣人族と人間の混血児なのである。それに気付いたのは、銀星と別の獣人族だと月神は言った。

その獣人族が誰なのかは言わなかったが、とても嬉しそうに言っていた。

銀星に、月神に、友達が出来た瞬間だった。

「暇だなあ〜」

月神が呟いた。

銀星が呆れたようにため息を付く。

月神は、銀星のその反応に少々腹を立てる。

「暇なら、何か夢中になるものを見つけたら」

やはり銀星は大人だ。改めてそう思う。

やはり月神は子供だ。改めてそう思う。

二人が出会って、三日目。

月神は未だに、旅（？）の理由を教えてはいない。

だが、銀星は自分から聞き出すとはせず、月神が話してくれるのを待っていた。

「夢中になるものはあるさ……。雨で”匂い”が消えて、情報があまるまで暇なんだよお〜」

銀星には月神の”匂い”が完全に嗅ぐことが出来ない。

だから、月神の悔しさと倦怠感が分からなかった。

こういう時には、質問するのに限る。

そう思った銀星は、月神の方を向いた。

「誰の”匂い”を探しているんだ？必死になる程の奴なのか？」

「オレは、獣人族の『王』を探してる」

次第に、月神自身でも隠しきれない程の憎悪が露になる。

思わず身震いしてしまう程……。

「あいつ等は、オレの両親を殺したんだ。……だから探す。どうせ長くは生きられない身体だしな。オレの命と引換にしても、『王』は殺す」

暫く、銀星は月神の憎悪に震えていた。

そのことに気付いた月神は、申し訳なさそうな笑みをさせてパタと手を振った。

「んな顔すんなよ。シラケるじゃねえか」

「……」長く生きられない”って、どういうことだ？」

頭の片隅にあつた疑問を、銀星は躊躇い無く聞いた。

月神は冷や汗を流し、そんなこと言った？、と聞き返す。

月神は苦笑してその答えを言う。

「そのまんまの意味なんだけど……。オレさ、人間の身体が獣人族の能力に付いていなくてさ」

月神本人によると、父親が人間だったために元は人間の身体だったらしい。

それに、母親の獣人族の能力が付いて来て元の身体はボロボロなのだ、と月神は言っていた。

「あと……。どれくらいなんだ？」

銀星は深刻な顔で言う。だが、月神は……。

「知らねえ」

このやるお……。耳の穴ほじりながら言いやがった。

銀星に言葉は無い。

呆れて言葉が見つからないのだ。

「でもな、だから今たくさんの思い出を作っておくんだ。オレが生きた証を残すために」

月神は、蒼い空を遠く、遠くを見つめていた。

銀星は、そんな月神を見つめていた。

ふと、思い出したように月神は銀星を見た。

パチッ、と目が合う。

「一度だけ！一度だけ、お前の獣人型を見せてくれ！」

「・・・はあ？」

今が、ここに、誰もいなくてよかった。

銀星はそう思った。

こんなこと、人前で言うことではない。

月神は、そんなこと気にも止めていないようだ。

「ほら、オレが明日も生きてるとは限らねえだろ？」

月神は手を合わせて頼み込んだ。

人前でないことは、分かってる・・・。

だが、なかなかその気持にはなれない。

銀星は考え込んでいた。

「・・・仕方ないな・・・」

銀星は四つの脚で立ち上がると、ため息と一緒にそう言った。

月神は、あからさまに喜ぶ。

まるで、本物の子供だ・・・。

獣人型になるのは簡単なことではない。『情』を一気に上昇させ

なければならぬ。

それが、どんな風の『情』なのかは定かではない。ただ、銀星の

場合は近くに主人がいないのだ。

どうも『情』が上昇するとは思えない。

「いくぞ・・・」

銀星は思い出す。

銀星曰く、あの知的な顔を・・・。

銀星曰く、あの純粹を心を・・・。

銀星曰く、あのいい匂いを・・・。

その瞬間、銀星の身体が輝いた。

大型犬は、背の高い青年の姿へと変わった。

五十年以上生きているおかげで腰くらいまで伸びた髪。

全身を銀色の体毛が包み、太陽に反射してキラキラと輝く。

一言で表現するならば、綺麗だった。

「おおお！綺麗だなあ〜！！」

「これでいいんだろぅ……？」

少しだけ、顔が赤い……。

どうやら照れ臭いようだ。

月神は、拍手で銀星をおだてる。

「サンキュな！いい思い出が出来た！！」

月神がそう言うと、銀星はすぐに犬型に戻る。

銀星も、月神の獣人型が見たいと思ったが……辞めておいた。

別れの日は、突然訪れた。

月神にある情報が入って来たのだ。

それは、今の街に住む猫の依頼でもあった。

ここから北の方角に消えて行った、金色の猫を捕まえて欲しい……

・とのことだ。

月神の瞳は、殺意の意味で輝いた。

”奴等”の情報を手に入れた月神が、こんなに変わってしまったことを銀星は知った。

「銀……」

月神は、震えた声で小さく言う。

恐怖……とは言い切れない。

月神の口元は笑っていたから。

「分かっている……。行ってこい」

銀星は、別れの言葉をあえて言わなかった。

またいつか、逢えると信じていたから。

「お前」

「はい！ストップ！！」

銀星が何かを伝えようとしたが、月神は銀星の口をムギユツと押さえた。

「オレ様の名前は”お前”ではなくい！……また逢う時は、キール”って呼んでくれよ？」

月神は苦笑して言う。

銀星は、クスツと笑って返した。

「これは、ある獣人族に言われたんだけどな、”オレ達獣人族にも明日のことは分からない”。生きてたら、また逢おうぜ！」

月神は漆黒の翼を広げ、大空を目指す。

その姿が見えなくなるまで、銀星は見つめていた。

優しく、微笑んで。

銀星は、次の街を目指す。

今度は、あいつを名前で呼んでやろう。

それが何時になるのかは分からないが、名前で、キールって呼んでやろう。

そんなことを思いながら、銀星は夕焼けの空の下を悠然と歩いて行くのだった。

## FILE 11：死闘（前書き）

多少、えげつない部分があります。注意して下さい。感想・評価待  
つてます



牙磨の喉元の肉が、雅王の足下にベチャ・・・と落ちた。  
削ぎ捕られた所から、鮮血が飛び散る。牙磨は、一生懸命になっ  
て止めようとする。

だが、噴水のように飛び散る血は止めようがない。

「が・・・おう・・・さ・・・ま・・・」

牙磨は喉元を押さえながら、最期に雅王の名を呼んで倒れた。

「兄貴い!!!」

「兄さん!!!」

雅王は、牙磨の血を浴びて笑う。

まるで、美酒を飲んだ後のように・・・。

あつという間に殺された牙磨の側に、牙呀と牙羅が寄り添った。  
互いに、兄を呼びかける。

喉を削ぎ捕られた牙磨が返事をするのではない。

それでも、二人は呼びかける。

「兄貴いい・・・」

「に、兄さん・・・」

いくら呼んでも返事はない。

二人はとうとう、泣き崩れた。

「うううっ・・・。うわああああああいああ!!!」

二人は泣き叫びながら、無謀にも雅王に牙を向けた。

「止めてええ!!!」

今まで、何も言えなかった美也が悲鳴のように叫んだ。

先程のキールと同じように・・・攻撃を仕掛ける二人の身体が止  
まる。

そして、キールの時と同じように雅王はカウンターを図る。

だがそれは、キールの時のようにはならなかった。

美也の『月』の力が発動したのだ。

雅王から二人を守る白い光がそこにはあった。

これで、手を出せなくなった雅王は怒りの雄叫びを上げる。

その声に反応してか、しないでか・・・倒れていたキールはゆっ

くりと身体を起こした。

獣人族・・・と言っても、キールは身体は人間・・・。

獣人族の能力は行き届かず、全身は血まみれだ。

「コ・・・コロ・・・ス・・・」

その口調からでは、意識があるのかも無いのかも分からない。

もはや、執念だけで立っているようにしか見えない。

「まだ・・・生きてましたか。次は、間違いなく殺してあげます！」

「！！」

牙呀と牙羅に手が出せなくなった雅王は、全身ボロボロのキールに向かって言った。

キールは、反応を見せない。

その隙に、雅王が鋭く尖った爪をキールの頭に振り降ろした。

タケトと美也は、思わず目を閉じた。

そんな二人の耳には、雅王の叫び声が木霊した。

振り降ろした爪を、一瞬の内に全て剥ぎ取られたためである。

キールは、その爪の全てを手の中に収めていた。

そこから、ポタリ・・・ポタリ・・・と雅王の血が流れる。

キールは、流れ落ちるその血をペロツと舐める。

思いつきり噛みついた時とは違ったが、血を飲むのは変わらない。

少量だったためか、あまり傷は塞がらなかった。

「相変わらず・・・不味い血だな・・・雅王？」

剥ぎ取られた方の手を押さえ、雅王は低く唸り声を上げた。

キールは疲れたように笑う。

何時の間にか、手に持っていた劔は細く、長いものになっ変わっていた。

この方が、多少不利ではなくなると考えたのだ。

「テメエだけだ・・・。殺すのは・・・テメエだけでいい・・・」

劔の先を雅王に向け、キールは笑う。

「今度こそ・・・殺してやるよ・・・」

この言葉に、雅王はキレた。

額や首筋にくつきりと浮かび上がる青筋が、どれだけキレているのかも語っているようだ。

「がああああつ!!！」

怒りに狂った雅王は、その雄叫びと共に攻撃してくる。

キールは素早く、それを避けた。

避けた瞬間に、細長い剣を雅王の身体に向ける。

「うらああああつ!!！」

ザクツツツツツ!!!!!!!!

全ては、一瞬にして終わった。

「月神君つ!!!!？」

「キールつ!!!!？」

タケトと銀星が同時に叫んだ。

キールと雅王の二人は、互いに自らの武器を手放していた。

お互いが、互角の力で投げ払ったのだらう……。

見たところ、二人に外傷は無い……。

だが、地面に膝を付けたのはキールの方だった。

時間差で、ポタリ、ポタリと赤い血が腕から滴り落ちる。

それを見て、タケトと銀星は絶望し、雅王は誇らし気に笑った。

「はははっ！何が」今度こそ殺す”だ……。傷さえも付けられな

……。がはっ!!！」

「!!!!!!？」

決して、雅王が”無傷”とは言ったつもりは無い。

雅王はキールよりも、多くの血を流しながら……。傷を付けた本人を見下して怒りに燃えた。

キールと同じように、時間差で傷口が開いてしまったのである。

金色の王は、漆黒の狩人に何も出来なかった。

何故なら、雅王自身の身体はベッタリと地面に張り付いていたからである……。

「……なっ!？」

倒れた本人でさえ、今の状況を理解することは出来なかった。  
否、理解したくなかった……。

コウモリごときに、傷付けられ膝まで……いや、動けなくなる……そんなこと、プライドの高い雅王が認める訳がなかった。  
”形成逆転”。

漆黒の狩人は、痛々しい身体をゆつくりと起こし、金色の王を今までに無い冷ややかな瞳で見下した。  
勝負あり。

倒れた格好のまま動けない雅王に、黒い剣を突き付けた瞬間からキールの勝利が決まった。

「……死ぬか?……」

キールが、冷ややかな瞳のままと言った。  
一瞬にして、その場の空気が凍りついた。

雅王は、あまりの恐ろしさにその身体を震わせる。  
それこそ駄目だ、と、タケトは止めようとした。

キールの返答は無い。

ただ、ゆつくりと黒い剣を下に降ろした。

「獣人族の『王』も、こんなものか……?」

キールは続けて言う。

「こんな奴……殺す手が勿体無い……」

そう言っつて、雅王を嘲笑う。

そんなことをされても、雅王は何も出来ない。

これほど悔しいことは無いだろう。

「キール!!」

銀星がそう呼ぶと、キールはさっきとは違う笑みを見せた。

「……銀」

子供が母親に呼ばれた時のような、嬉しそうな笑み……。  
その後、キールは再び膝をついた。

慌てて、牙呀・牙羅を除く皆がキールの周りに集まった。

「キール!? おい、キール!!」

銀星は必死になって呼びかけた。

顔は青冷め、息は荒い。

視界も、ぼんやりしてきたようだ……。

キールの瞳に光は無い。

タケトは、自分の『月』の力でなんとかしようと考えた。

しかし、それは実現されなかった……。

消えていたのだ。

先程まで、確かにあった『胸の月』が……。

「な、なんで!？」

「使いすぎ……だ……」

銀星に抱えられたキールが、苦笑して言った。

無理に起き上がるうとするが、銀星に止められて渋々そのまま話し始める。

「お前の『月』……は、役目を果たした……。もう……。必要無いだろ……。?こいつ等を、どう、するかは……。美也の役目……。た」

今までの無理が身体に影響を与えていたようだ。

ゴホゴホツとむせ、口から少量の血を流す。銀星が、もう喋る

な、と言ってもキールは話し続けた。

「ふふ……。もお……。遅えんだよ、銀。あの時、お前に逢えてて……。よかった」

キールの身体は、ボロボロだった。

外見も、中身も……。

よく、ここまで身体がもったとキールは嬉しそうに言う。

そして、美也を牙呀と牙羅の側に向かわせる。

その『月』の力で、牙呀と牙羅を幸せにして欲しいと、悲しみを消してあげて欲しいと頼んだ。

「……はい」

はつきりと答える。

それを見て、キールは笑った。

「いい瞳だ・・・」

兄を亡くした二人は、悲しくて抵抗するという考えに達しなかった。

美也が、おいで？、と微笑みかける。

二人は、トテトテと美也に近づく。

二人は美也に抱きしめられ、ホロホロと小さい涙を流した。

美也の左目から、優しい『月』の光が・・・牙呀と牙羅を包み込む。

その光が消えた時、牙呀・牙羅・

・そして、牙磨も小さなライオンに姿を変えていた。

三人・・・いや、もはや三匹となった彼等は、スヤスヤと寝息をたてていた。

彼等、三兄弟の悲しみの闘いは終わったのだった。

残っているのは、未だに地面に寝そべっている雅王だけである。

美也は、迷わずに雅王に近づいて行った。

「もう、眠りませんか・・・？」

美也が言ったのは、そんなことだった。

**FILE 11：死闘（後書き）**

次回が最終回になります。

## FILE 12：エピローグ（前書き）

今まで読んでくれてありがとうございます！今回が最終回となります。本編を読んだ後は、必ずあとがきを読んで下さい。

## FILE 12：エピソード

「もう、眠りませんか・・・？」

美也は、そう言った。

力無く地面に寝そべった雅王に対して。

雅王は驚いた表情を見せ、首だけを美也に向けてみせた。

地面に両膝を付け、雅王を優しい瞳で見つめる。

「・・・」

雅王は何も答えなかった。

「何故、こんなことをなんで・・・？」

美也は質問を変える。

すると、雅王は自力で今の状態から仰向けに態勢を整えた。

話をするなら、この方が喋りやすい。

雅王は、左腕を上げて美也の顔に触れた。

「私に・・・『月』を・・・」

雅王はそれしか言わなかった。

『月』を求め、キールの両親をも殺し、同族の子供にまで手を付けた。

「何故、そこまでして『月』を欲しがるのだ？」

横からサルサが口を挟む。

「人間に・・・なりたい・・・」

雅王はそう答えた。

美也は、雅王の手を『月』に触れさせる。

「ご主人様！」

「いいの！・・・いいのよ。この人が人間になりたいのなら、これで・・・」

ミレイが止めようとするが、美也は”NO”と言い張った。

美也に迷いは無い。

本気で言っているのだ。

「キール！！あんだ、何か言いなさいよ！！！」

ご主人様を失うかもしれない……。

そんな考えが、ミレイの声を震わせる。

涙も溢れてきた。

しかし、キールは何も答えなかった。

その間にも美也は、『月』の力を解放し始める。

もし、本当に『月』を失えば美也の右目は、再び光を失うことになるだろう……。

美也の右目から、涙の粒がコロソと落ちた。

真ん丸な月の形をして……。

「……くつ、くくくく……。馬鹿な生き物だな、人間ってものは！！！」

雅王は、涙の粒を一口。

そして、美也から『月』を奪い取った。

身体は動く。

雅王は美也の『月』をゴクリと飲み込むと、口の端を吊り上げた。

「これだ……。この力だつ！！！」

みなぎる力……。すぐに癒される傷。

これこそ、雅王が求めた力……。

てか、しつけえ奴だなあ……。

キールは、雅王の姿を見てゆっくりと起き上がる。

やれやれ……。といった感じだ。

『月』を捕られ、美也はその場に座り込んだ。

彼女は今、右側が全く見えていない。

「雅王！もう止めとけ。その力は、お前には大き過ぎる」

キールが言った。

だが、雅王は聞き入れようとはしていない。

そんなキールを嘲笑う。

「私に不可能は無い！」

雅王はそう言った。

だが、キールもそんな雅王を嘲笑った。  
それに、雅王は青筋を作る。

「キール……！」

深手を負ったキールが、ただ立っていられる訳がない。  
キールの身体を支える銀星が呟く。

キールは、申し訳無さそうに銀星に笑いかけた。

「大丈夫。これで……終わりにするから」

その一言に、再び雅王は青筋を作った。

怒った 怒った

そんな感じで、キールは笑った。

ただ、笑っているだけではなかった。

これには、キールの作戦もあつたのだ……。

「ミレイ、お前は美也を守れ」

キールは、続けて……。

「サルサと銀は、オレと闘ってくれ」

すると、サルサが心配そうな声を出す。

なんとなく、躊躇っているようにも見える。

キールは、笑みのまま鋭い爪をパキパキと伸ばしていく。

「言つたよな？お前に選択支は無えって」

一気に、サルサの顔から血の気が引いた。

キールは必死だった。

いや、そう見えたただけかもしれない……。

銀星は承知する。

サルサも、渋々承知した。

「……雅王、人間になつてどうするんだ？」

「ふふふ……世界の征服に決まっていますでしょう……？」

さも、当たり前のように雅王は答えた。

キールは、呆れたようにそれを笑う。

「それは、美也の瞳だ。返して貰うぜ？」

その一言が、闘いの合図だった。

わおおおおお・・・ん！！

うをおおおお・・・ん！！

サルサと銀星が、同時に吠えた。

予め、”マーキング”をしていたようだ。二人の声に反応して、荒れ果てた地の草や木が雅王めがけて伸びて行く。

『月』を手に入れた雅王に、どこまで通用するかは分からないが、今の二人にはこれしかなかった・・・。

”魂の矢”は生命力の使い過ぎる・・・。  
そう思った銀星は、決して”魂の矢”を使わなかった。

それも承知していたキールが、自分の最期の血を劔に変え、草や木が巻き付く雅王を貫いた。

普通なら、これで死んだはずだ。

普・通・な・ら・・・。

「くっ・・・くくく・・・。それでも攻撃のつもりか？」

やはり・・・死んではいなかった・・・。

キールの劔は、刺さった状態でボキッと折られてしまった・・・。  
折れた劔は、ドロリとした血に戻った。

雅王は勝ち誇るように、草や木に巻き付かれながら笑っている。

「ふははは・・・！！やはり、私は最強だ！！」

その横で、美也がユラ・・・と起き上がる。ミレイが止めるのも聞かずに、ゆっくりと雅王に近付いて行く。

もう必要の無くなった美也に、雅王は鋭く爪をたて腕を振り上げた。

美也はそれを見ても微動だにしない。

ただの強がりだと思った雅王が、一息に爪を振り降ろした。が、それは空を切り裂いた。

美也には当たらなかったのだ・・・。

間違い無く、美也を切り裂いたつもりだった雅王が、もう一度腕を振り降ろす。

だが、やはり・・・美也には当たらない。

雅王は焦っていた。

最強であるはずの自分が人間を殺せないのだから……。

「もう……辞めましょう?」

静かに、穏やかな口調で美也は言う。

自分が最強なのだと言っていた雅王は、一歩足を引いた。

明らかに美也を恐れていた。

「何故だ……?何故、この女を恐れている……?わ、私は……」

それを見て、キールは笑った。

「知らなかったのか……?猫の『月』を手に入れた者は、持ち主を殺せないんだよ……」

キールが言う。

その後に、銀星とサルサが諦めるように言った。

雅王は、言葉無く首を振る。その動きはもどかしく、動揺しているようだ。

「持ち主が拒めば、『月』はその力を失う……美也がミレイを想う気持ちには、お前は小さ過ぎるのさ」

キールはそれに続けて言う。

「だから言っただろう?」お前に、その力は大き過ぎる……って美也と雅王の距離は、既に目と鼻の先ほどとなっていた。

その美也に反応しているのか、雅王の身体が白い光に包まれていった……。

雅王は、美也を傷付けられないと分かっているながら美也に向けて、爪を振り降ろす。

「美也が、お前の身体に触れて断れば……お前の中にある『月』は美也に返しされることになる……。これで、もう終わりだ……」

・雅王……」

雅王の手が、ピタッと止まった。

美也が拒んでいることは分かっている。つまり、美也から離れれば『月』は手に入れることが出来るのだ。

「こつやって抵抗を続けるよりも、今逃げてしまった方がいいのではないか……？」

そう思った雅王は、美也から……今、ここにいる奴等から離れようと立ち去ろうと動いた。

だが

脚が動かない……。

それは、雅王にも、美也にも、タケト達にも分からないことだった。

「っは……！！！」

ジャリ……という音と共に、キールは膝を付いた。

「キール!?」

サルサと銀星が驚いた様子で同時に叫んだ。

今の異常な状態が、再びキールの仕業だと気付いた雅王は、いい加減にしろ、と叫んだ。

「この私に……何をしたああ！！！」

キールは、苦笑している。額には冷や汗も見える。

どうやらまた、獣人族の力を使っているらしい。

しかし、一体……何に？

誰もがそう思った。

キールの膝や腕はガクガク震え、もう誰かが支えていても立っていられるかどうかは分からない。それ程の血を吐いていた。

おそらく、獣人族の力のせいで内蔵のどれかが破壊してしまったのだろう……。

「キール！辞めるのだ！！そのままだと、死んでしまうぞ！！！」

そう叫んだサルサを、キールは睨んだ。

”何故だ……？”と、サルサは自分がしたことを振り返る。

……

それ程悪いことはしてないはずだが？

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ、五月蠅えんだよ……」

それは、心配するな、とも聞こえた。

そんなキールの顔は青白く、紫色の瞳と髪が浮かび上がるかのようだ。

キールに、限界が近付いていた。

「こつちの方が先だあ！貴様・・・一体、この私に・・・何をしたあ！！」

雅王が言う。

彼の顔も青白く、苦しそうである。

キールは、少量ながら血を吐き、雅王と向き合った。

「雅王・・・お前、オレが獣人族でもある・・・ってこと、忘れてんだろ？」

雅王は、何かに気づく。

その視線の先には、ドロリと溶けた黒い劔がある。

「オレは・・・コウモリなんだぜ？」

キールは言つて、指をくいつと曲げて見せる。

すると、雅王の身体に異変が起こった。

爪を鋭く伸ばし、己の喉に突き付ける。

雅王の顔は恐怖心に襲われているようだった。

「どおだ？恐えだろ・・・身体が勝手に動くのは」

キールが言つと、地面のドロリとした血が再び形を変える。

キールの能力は、自分の血を操ること。

雅王の身体が動かないのは、そのせいだったのである。

「・・・っ！あの時があっ！！」

”あの時”

サルサと銀星が草や木で動きを止め、キールが黒い劔を雅王に刺した”あの時”・・・。

雅王がもがいて、『月』を守ろうとする。その度に、キールの表情は辛そうになった。

「美也！早くするのだ！いつまでもこのままでは、キールは死んでしまっ！！」

サルサは必死になって言った。

「い、いやだ……」

サルサの言葉のあと、美也は雅王の胸に手を触れた。

雅王は逃げる。

だが、身体は動かない……。

キールが、最期の力を振り絞って力を使っていたから。

「私は……あなたに『月』を渡しません。あなたがその力を使うことを拒否します」

その瞬間、光が漏れた。その光は雅王を苦しめ、美也を優しく包み込んだ。

雅王は戻りたくなかった。

動物園で独りきり……連れ添う者も無く、従える者も無く。

ただ、決まった時間に餌を貰って過ごす日々……。

雅王は一滴の涙を流して、金色の獣へと姿を変えた。

もう二度と、彼が獣人型になったり人間の姿になったりすることは無いだろう。

そして、美也の瞳に再び光が戻って来た。

彼女が喜びに浸っているのと同時に、キールは力無く倒れた……。

「……くん……」

悲しそうな声が、キールの耳に微かに届いた。

キールが、辛そうに瞳を開く。

最初に見えたのは、まあるい月だった。

そのすぐ側に、涙を浮かべて自分の名前を呼びかけるタケトの姿……。

他にも、心配そうに、涙を浮かべて、自分を見つめる奴等の姿が見えた。

「は、ははっ……。……ダッセエな、オレ」

キールは苦笑して言った。

それを聞いてタケットが首を振る。

キールは美也を見つめる。そして、笑った。

「アリガトな・・・助かった」

「どういたしまして」

美也は笑って返した。

キールの頬に、何か生暖かいものが触れた。それは、頬の下へ流れて行く。

上を見上げると、そこには涙を流す銀星の姿があった。

「・・・ばあゝか、いい男が泣いてんじゃねえよ」

キールが泣いている銀星を見て、笑って言った。

「なあ、銀。オレ・・・ちゃんと、生きた証残せたかな・・・？」

銀星は黙って頷く。

だが、キールはもう一度聞いた。

「・・・？銀、どこだ？目の前が暗くて・・・お前が見えない・・・」

キールの声は、かすれていた。

「残せたとも！」

涙で声の出ない銀星に変わって、サルサが答えた。

「ちゃんと残っている！俺達の胸の中に、しっかりと！！」

”お前に聞いてねえ”と言うものだとばかり思っていたのだが、

キールは嬉しそうに微笑んだ。

「・・・そっか」

微かだが、キールの身体が痙攣を始めた。

その時は来たようだ。

「サルサ、タケット・・・ありがとな。・・・銀・・・また逢おうな」

キールはそう言って人間の姿に戻ると、静かに瞼を閉じた。

雪のように冷たくなったキールに、空から本物の雪が舞い降りてそっと触れた。

もう春だというのに、しんしんと舞い降りる冷たい雪。

タケトやサルサの肌に触れると溶けるのに、キールの肌には雪が積もる。

「月神君……ありがとう。今まで、本当に……」

「タケト……悪いが、今はキールと二人きりにしてくれ……」  
今まで口を開かなかった銀星が言った。

タケトは、サルサ達を連れてその場を離れて行った。

まだ、雪は降り続けている。

犬型になった銀星が、冷たくなったキールに寄り添うように伏せていた。

「キール……寒いだろう？俺が、暫く温めてやる……」

銀星は、涙を流し低い遠吠えを続けた。

ずっと、ずっと……。

FILE 12：エピソード（後書き）

キール：・・・もういいか、銀？

銀星：ああ、

そろそろいいだろ

キール：アイツ等、オ

レが死んだと思ってんだろおな

銀星：そ

うだな・・・って、おい。もう行くのか？

キール：ああ。ま、明日のことは獣人族でも分からない・・・

銀星：”生きてたら、また逢おう”・・・だろ？

キール：ああ！また逢おうな！！読

者の皆も、生きてたらまた逢おうぜ！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2762b/>

---

生きた証

2010年10月16日14時59分発行